『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第６７回】

高３のわたしは、子どもの頃の夢を追いかけ「医学部」受験を試みました。国立大学に入学できれば、学費は私学より格段に安いのはわかっていましたから、東京医歯大、群馬大などを狙っていました。当時の医学部の受験教科は国立・私立を問わず、国語（現代文・古典）・数学（数Ⅰ、ⅡB、Ⅲ）・社会（日本史、世界史、地理から２科目選択）・理科（物理、化学、生物から２科目選択）・外国語（英、独などから１科目選択）というものでした。自信があったのは「国語」・「生物」・「英語」だけ。「数学」なんて平均点にも届きませんでした。これじゃ受かるわけありません。しかし、一人っ子のわたしの夢を実現させるチャンスを与えて、高校から東京に送り出してくれた両親のことを考えると、「ボク、医学部はムリです。文科系の大学を受けさせてください」とは、口が裂けても言えませんでした。２学期秋の面談で、担任の先生からは「早慶は70%、MARCH（明治・青学・立教・中央・法政）なら今の成績でも受かる」と言われました。医学部があるのは慶応のみ。これが超難関。そのうえ、「医学部以外なら」という条件付き。これではどうにもなりません。MARCH なら哲学科を受けたいな … と思っていました（あの頃にもどれるなら、絶対「上智」の神学部に入りたいなぁ！）。どう考えても「文科系」のわたしの学力では医学部は「狭き門」でした。きょうは、その《狭き門》についてのお話です。

✞　『狭い門から入りなさい』　―『マタイ』７章 13～14 節 ―

13 狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。
14 しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。

「狭き門」― この言葉は、おそらく大多数のみなさんが一度は聞いたことがあると思います。アンドレ・ジイドの小説『狭き門』をお読みになった方もいらっしゃることでしょう。でも、小説の題名としてより、有名高校や難関大学を受験するとき両親や人生の先輩から、「あそこは狭き門だから、がんばって勉強しろよ。」、「そこを突破すれば、きびしい生存競争のなかで生き抜き、栄誉や出世が約束されるはずだから …」などと聞かされたのではありませんか？　じつは「もらえる保証がないご褒美」なのに！　世間では「いい学校を卒業すれば、いい会社に入って出世して、そんな自分に相応しい女性（男性）にめぐり会い、シアワセな生活ができる」と、よく言われますよね。でも「いい学校」・「いい会社」って、どんな学校であり、会社なんでしょうネ!?　わたしは自分の息子たちにこんなことは一度も言ったことはありません。孫たちにも言わないでしょう。言いたくありません。夢に向かって努力することはいいことです。しかし、その結果得た地位や名誉、財産のために、あるべき人間としての自分を見失う人がいるのも確かです。いま、強大な政治的権力を握ったがゆえに、民主主義を、人権を、あるいは平和をないがしろにして、むちゃくちゃな政治をしている人たちを見れば明らかです。それを支持する人たちがいる現実も信じられませんが…。それはともかく、通常私たちが使う「狭き門」の意味は、本来のイエスの言葉とはかけ離れています。

「狭い門」・「広い門」とは

さてそれでは、「狭い門」、「広い門」とは何のことか、みていきましょう。

中近東(通例、アフガニスタンより西の西アジアとリビア以東の東北アフリカ)の都市の多くは、外敵から自分たちを守るための石の城壁によって囲まれ、城門によって外部と通じています。いわゆる「城塞都市」です。城壁は敵の攻撃に耐えられるようとても分厚く、城門はまるでトンネルのようだといいます。城門には頑丈な扉があり、日没とともに閉じられ、日の出とともに開かれます。

「広い門」というのは、一般の市民が通るための城門のことです。らくだや馬車、戦車なども通れる幅も高さもある門です。門外には広場があり、そこでは人々がにぎわう市(いち)が立ちました。町の長老たちは城門の傍らに座り、裁判をおこなったといいます。また、広場は時として処刑の場でもありました。都市の公共の活動はこの広場が中心になって行われ、城門と広場は共同体の権威の象徴でもあったのです。この門を出入りする人たちは、「社会的に認められた人たち」でした。

この城門の脇に小さな通用門があります。おとなが身を屈めて通るような狭く、細いトンネルのようなもの、これが「狭い門」です。日が沈んだ後、「広い門」は閉じられ、特別な用事がある者が許可を得て通る通用門です。そしてこの狭い門は「ある人たち」の通り道でもありました。ある人たちとは、社会から見向きもされない貧民や売春婦、ハンセン病患者、そして心身にハンディキャップがある人たちなどです。以前にもお話ししましたが、当時のユダヤ社会ではこうした人々は「罪人(つみびと)」、「穢人(けがれびと)」とされ、「日陰者」として扱われ、昼は大手を振って「広い門」を出入りすることができませんでした。彼らは人目を避けるように、細く・狭く・暗く・きたない通用門を通らなければならなかったのです。これが「狭い門」です。

「狭き門」は『活き活きと生きる道』に通じる門だ！

それではなぜイエスは、罪人や社会から見捨てられた人々が通る「狭い門」から入れといったのでしょうか。ここで14節の『命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。』に注目しましょう。

「命」という言葉については、第31回でギリシャ語では〈プシュケー〉という名詞が使われている ― ということを説明いたしました。もう一度書きますと、『マタイ』6 章に『自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか』(26節)と、「命」という名詞が二度出てきますが、この「命」のギリシャ語が〈プシュケー〉であり、『人間がいま現に衣食住によって生きている命を指している』という大貫 隆先生の言葉をご紹介しました。

きょうの『マタイ』14節の『命に通じる門はなんと狭く、』の「命」のギリシャ語は〈ゾーエー〉という名詞が使われていると山浦玄嗣先生は指摘されます。それではギリシャ語の名詞「ゾーエー」にはどんな意味があるのでしょう。

名詞・ゾーエー　：　①生きていくこと、生活。　②生命、生存。　③生き方。

動詞・ゾー　：　①生きる、生活する。　②元気である、働き盛りである、力強い、ピチピチしている。　③ゾーすること＝ゾーエー

ここで山浦先生は日本語の「いのち」との違いを説きます。日本語の「いのち」の第一義は、「生命」であり、「生活」という意味はありません。「元気であること」、「力強いこと」、「ピチピチしていること」などの意味は、世界最大の五十万語を収載している『日本国語大辞典』(小学館)にもないそうです。また「いのち」に対応する動詞もないといいます。「ゾーエー」という言葉は、『ただ生きるのではなくて、活き活きと明るく力強く喜びに満ちてピチピチと生きる』ことだと山浦先生はおっしゃいます。そうなんです。「狭い門」は「活き活きと明るく力強く喜びに満ちてピチピチと生きる」人生に通じているのです。だからイエスは「狭き門を通れ！」と言いました。

「ホームレス」だったイエスが示したかったこととは

前島（まえじま） 誠（まこと）先生（元玉川大学文学部教授）は、このたとえ話の三つの要点を指摘されています。

（1）見捨てられた人たちの存在に目を向けることの必要性

（2）自分も彼らと何ら変わりがないことの認識と自覚

（3）周囲を気にせず、自分固有の門を見いだすことの重要性

私たちは「見捨てられた人々」というと、さまざまな理由のために人間らしい生活が困難である人たち、たとえばホームレスの人々や、心身にハンディキャップがあるため希望する職業に就けなかったり、差別を受けたりなどの苦しい生活を余儀なくされている方々を思い浮かべます。しかしもっとよく社会を見渡すと、多くの人たちから「あまり関心を持たれず、自分たちとは無縁と思われている人たち」も「見捨てられた人々」と考えるとすれば、その数はより大きなものになるはずです。

たとえば、6 年前の東日本大震災によって命は助かったものの、「これからはあなたたちの自己責任で暮してください」などと補償や支援を縮小・廃止された被災者の方々。原発事故によってふるさとから離れた生活を強いられ、いまだに帰郷できない方々。同じ日本なのに多くの米軍基地をかかえさせ、負担軽減を約束する一方、美しい海を埋め立て新たな基地をつくろうとする現政府に「植民地」扱いされる沖縄の方々。現代の日本を考えれば、ほかにもたくさんの「見捨てられた人々」がいるはずです。前島先生の要点（1）について考えてみましょう。

〈隣人愛〉は「見る」ことから始まる

『聖書』に描かれたイエスは、たびたび「社会から見捨てられた人たち（ハンセン病などの病者、売春婦、徴税人など）」に近づき、病気を癒し、彼らが受けている社会的差別・偏見から解放しています。ある人に「目を向ける」― ということの大切さについては、第 12 回の『善きサマリア人のたとえ』（『ルカ』10.30～35）でお話ししました。このたとえ話を簡単にふり返りましょう。

ある人が旅の途中、強盗に襲われ瀕死の状態で倒れていました。通りすがりのユダヤ教の祭司も、神殿に仕えるレビ族の人も、見て見ぬふりをしました。そこへサマリア人が通りかかり、この男を介抱し、宿屋へ連れて行って、宿賃と医者へ払うお金まで払って世話を頼みました。「この三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。これが「わたしの隣人とはだれか？」という律法学者の問いに対するイエスの返答でした。律法学者は「（敵対関係にあった）サマリア人だ」とは言えず、「その人を助けた人です」と答えます。するとイエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言った ― という話でしたね（たくさんの大切な内容がある話なので、ぜひ第 11～13 回をもう一度お読みください）。今回はその中の 33～34 節『旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って …』に注目してみましょう。土井健司（どいけんじ）先生（関西学院大学教授）はまず、『その人を見て憐れに思い』の「見て」に注目されます。祭司、レビ人、そしてサマリア人も倒れている男を見ました。先生は、サマリア人だけが「この男がユダヤ人であり、自分はサマリア人である」という「境界線」を乗り越え、「一人の人間」として「この人を放っておくことはできない」と手を差しのべたのだとされます。サマリア人は「見ただけ」ではなかったのです。

「腸（はらわた）がちぎれる思い」

さらに土井先生は「憐れに思った」という言葉に注目します。「憐れ」のギリシャ語は、splanchnizomai（スプランクニゾマイ）という言葉で、その語源（「スプランクノン」という名詞）は、獣の「内臓」を表わす言葉だったといいます。のちに「人間の内臓」を指すようになり、さら

に人間の「内面・心情」を意味するようになりました。ですから、共同訳で『憐れみ、』と訳された言葉は、岩波版聖書では『(サマリア人は、彼のあり様を見て)腸(はらわた)のちぎれる想いに駆られた。』という訳になっています(佐藤研(みがく)訳)。耐えられないほどの激しい悲しみの感情におそわれ、目の前の人を見過ごすことなどできないという想いに駆られました。サマリア人はそれほど「強くこころを動かされた」から旅人を助けずにはいられなかったのです。第 13 回でイエスは「誰が隣人か」ではなく、「誰が隣人になったか」を問うたと説明いたしました。目の前にいる人の「隣人」になる ― 。しかしこれがいかに難しいことであるか …、胸に手を当てれば、そっとため息をつくほかはありません。そんなことを考えていたら、一つの詩を思い出しました。まずお読みください。

夕焼け　　吉野 弘

いつものことだが
電車は満員だった。
そして
いつものことだが
若者と娘が腰をおろし
としよりが立っていた。
うつむいていた娘が立って
としよりに席をゆずった。
そそくさととしよりが座った。
礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。
娘は坐った。
別のとしよりが娘の前に
横あいから押されてきた。
娘はうつむいた。
しかし
又立って
席を
そのとしよりにゆずった。
としよりは次の駅で礼を言って降りた。
娘は坐った。
二度あることは　と言う通り
別のとしよりが娘の前に
押し出された。
可哀想に
娘はうつむいて
そして今度は席を立たなかった。
次の駅も
次の駅も
下唇をキュッと噛んで
身体をこわばらせて――。
僕は電車を降りた。
固くなってうつむいて
娘はどこまで行ったろう。
やさしい心の持主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持主は
他人のつらさを自分のつらさのように
感じるから。
やさしい心に責められながら
娘はどこまでゆけるだろう。
下唇を噛んで
つらい気持ちで
美しい夕焼けも見ないで。

(聖母文庫、2016)

11 年間の東京での学生時代、何度もこの「娘」さんと同じような経験をしました。疲れていたとき以外は席をゆずることができました。でも、混みそうな時間帯には座席に座ると同時に寝たふりをしたことが何回もありました。席をゆずってあげたい気持ちはあるのに、その日のこれからの予定・心身の健康状態・同様の状況での過去の体験・他者(ひと)の眼・目の前に立った人の第一印象などに縛られ、「見た」だけで済ませてしまったうしろめたさ …。「娘」は「私」でもありました。

私たちの毎日の生活には、これに似たような状況での他者(ひと)との出逢いはいつもあります。その一つひとつの場面で、私たちは目の前の人に何ができているでしょうか。『私たちの心の壁は、相手によって開いたり閉じたりします』、『何者であるかを乗り越えて、一人の人として目の前にいる他者と出逢うことが隣人愛です』と土井先生は書いておられます。「そんなことを言われても …」と、わたしなどは「隣人愛」という名の「荷の重さ」に怯(ひる)んでしまいます。先生はつづけます。『この出逢いを成立させる者が「神」です』。

私たちはとても弱い存在です。「こうありたい」と思ってもなかなか思い通りにはいかないことがほとんどです。でも、力強い「助(すけ)っ人(と)」がいらっしゃいます。それは神さまであり、『けがれなき聖母のお導きに身を委ね、聖母とともに働きなさい』と、聖コルベは言い残しておられます。

神さま、詩の中の娘さんのように、「他人のつらさを自分のつらさのように感じる」あの〈森田ミツ〉のような心を私たちにお与えください。　(2017.07.11.)

【引用・参考にした書籍など】　・新共同訳『聖書』
・前島 誠 『ナザレ派のイエス　増補版』(春秋社、2009)
・山浦玄嗣『イチジクの木の下で　下巻 』、『ガリラヤ
のイェシュー』
・吉野 弘『吉野弘詩集』(思潮社、2015)
・セルギウス・ペシェク『コルベ神父さまの思い出』